

琉球大学学術リポジトリ

COVID-19に関する学内アンケート報告書

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学人文社会学部 公開日: 2021-04-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 政策科学・国際関係論講座, Faculty of Policy Science and International Relations メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48385

COVID-19に関する学内アンケート報告書

政策科学・国際関係論講座

集計編

1. 調査概要

この調査の目的は「琉球大学の構成員（学生、教員、職員）が新型コロナウイルスに関する現状をどのように捉えているのか」を把握することである。調査主体は、琉球大学・政策科学講座／国際関係論講座（以下、政国）である。われわれ政国スタッフは、公共政策に関する教育研究活動を実践する立場から、この調査が必要であると判断し、実施した。本報告書は「新型コロナウイルスの感染拡大を抑止しながら、琉球大学の教育研究活動を維持する方策を検討する」ための基礎資料として公表した報告レポート（ver.2）を再録したものである。本報告書の図表は全て政国スタッフが作成した。

まず、ご協力いただいた琉球大学の学生、教員、職員の皆様に心から御礼申し上げます。調査方法はオンライン調査、調査期間は2020年3月31日から4月6日までである。回答者は1,561名である（このほか調査協力に同意しなかった方が6名）。2019年5月1日時点で琉球大学の学生、教員、職員の合計は11,416人であり(2019琉球大学概要データ版)、概算で8人に1人が回答した計算になる。

調査フォームはGoogleフォームで作成した。そのため、同一の回答者が複数回回答した可能性を排除できない。しかし、調査フォーム上では1人1回だけ回答するよう明記した。質問項目は「所属」「年代」「授業開始時期」「授業形態」「不安に感じていること」（以上、共通）、「職員間の距離」「在宅勤務」「電子決裁」（以上、職員限定）とした。調査フォームのレイアウトは附録を参照されたい。

協力依頼は政国スタッフがメール、SNS、口頭などで実施した。その結果、

教員の回答者に人文社会学部が多いなど回答者に偏りが生じた。部局ごとに実験や実習の有無など授業形態に違いがあるため、回答者の偏りは結果の偏りをうみだしている可能性がある。そのため本レポートでは区間推定や統計的検定はしない。琉球大学を代表するデータというよりも、1,561のケース・スタディの集積として捉えていただきたい。ただし後述するように、学生の回答者は全学の構成比率に近いものとなった。

協力依頼時には、学内の構成員に限り自由に拡散して構わないことを伝えた。結果として SNS 上でも一定の拡散がなされた。たとえば Twitter では本アンケートに関するツイート 6 つがなされた。そのうち最初の投稿に関しては 109 件のリツイートがなされた。こうした依頼方法をとったため、本調査の回答者（特に学生）はインターネットや SNS の利用頻度が多い層と考えられる。もっとも、インターネットや SNS の利用頻度と、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）に関する認識や行動との間に何らかの体系的な相関があるのか、現時点では不明である。

2. 調査結果

回答者の所属と年代

回答者総数は 1,561 名である。回答者の所属と年代を表 1 に示した。学生 93.0% (1,452 名)、教員 5.1% (80 名)、職員 1.9% (29 名) であり、9 割以上を学生が占める。参考情報として、2019 年 5 月 1 日時点の琉球大学構成員数 (2019 琉球大学概要データ版) は、学部生 62.9% (7,184 人)、大学院生 8.4% (957 人)、教員 7.7% (874 人)、職員 21.0% (2,401 人) である。本調査の回答者では学生が非常に多く、教員と職員が少ない点に留意が必要である。学生が多いことを反映して、回答者の年代は 20 代 66.2% と 10 代 26.3% があわせて 9 割以上を占める。それ以上の年代では 40 代が若干多い。なお、回答者の中には 2019 年 3 月卒

業者が若干名含まれている（自由回答で確認）。

学部別にみると、学生で回答者の割合が高いのは工学部、国際地域創造学部、人文社会学部、法文学部である。実際の学生比率（2019 琉球大学概要データ版）に比べて、回答者比率が低いのは、医学部（6.1% ポイント）、理学部（4.9% ポイント）、工学部（3.7% ポイント）であり、高いのは人文社会学部、法文学部、国際地域創造学部、観光産業科学部（改組のため合計：10.1% ポイント）、農学部（1.9% ポイント）である。教員では人文社会学部と国際地域創造学部、職員では大学本部の回答者が多い。

表 1 回答者の所属と年代

全体に占める%		10代	20代	30代	40代	50代	60代～	合計	
								%	人
学生 1,452人	人文社会学部	3.6	8.6	0.1				12.4	193
	国際地域創造学部	5.6	9.4		0.1			15.1	236
	法文学部	0.3	11.0	0.1				11.4	178
	観光産業科学部		3.2					3.2	50
	教育学部	2.8	6.0					8.7	136
	理学部	2.4	5.6					8.0	125
	医学部	2.0	3.5					5.5	86
	工学部	5.8	11.1					16.9	264
	農学部	3.8	5.6					9.5	148
	大学院生ほか	0.1	1.9	0.1		0.1	0.1	2.3	36
教員 80人	人文社会学部			0.3	0.7	0.5	0.3	1.8	28
	国際地域創造学部			0.3	0.5	0.4	0.1	1.3	20
	そのほか			0.1	0.9	0.8	0.3	2.0	32
職員 29人	大学本部		0.1	0.2	0.4	0.1		0.7	11
	そのほか		0.1	0.3	0.6	0.1		1.2	18
合計		26.3	66.2	1.6	3.2	1.9	0.8	100.0	1,561

授業開始の時期：Q1-2, 2-2, 3-2

他大学では授業開始の延期を表明する大学が多い。この調査では「2020年度の授業は、いつから始めるのがよいと思いますか？」と質問した。表2に所属ごとの割合を示している。網掛けは全体よりも5ポイント以上高く、斜体

は低いことを示す。

全体でみると、4割近くが「5月前半」を選び、それに「4月後半」と「5月後半以降」が続き、「4月前半」は少ない。所属別にみると、学生に比べて教員は「5月前半」や「5月後半以降」を選んだ割合が高い。それに対して「4月前半」を選んだ割合が高いのが、教育学部生、医学部生、大学院生である。教員免許や医師免許の取得スケジュール、学位論文の執筆スケジュール、遠隔授業や開始時期に関する学部の方針が影響していると推察される。

表2 望ましい授業開始時期

各カテゴリに占める%	4月		5月		合計 人
	前半	後半	前半	後半～	
学生 人文社会学部	14.0	30.1	36.3	19.7	193
国際地域創造学部	11.4	22.0	43.2	23.3	236
法文学部	10.7	23.0	47.2	19.1	178
観光産業科学部	10.0	22.0	44.0	24.0	50
教育学部	23.5	26.5	32.4	17.6	136
理学部	12.8	21.6	42.4	23.2	125
医学部	25.6	23.3	30.2	20.9	86
工学部	18.6	24.6	34.5	22.3	264
農学部	20.3	21.6	37.8	20.3	148
大学院生ほか	27.8	27.8	25.0	19.4	36
教員 人文社会学部	10.7	14.3	50.0	25.0	28
国際地域創造学部	10.0	20.0	40.0	30.0	20
そのほか	9.4	21.9	46.9	21.9	32
職員 大学本部	18.2	18.2	45.5	18.2	11
そのほか	5.6	33.3	33.3	27.8	18
全体	15.9	24.0	38.8	21.3	1,561

網掛け：全体より5%ポイント以上高い

斜体：全体より5%ポイント以上低い

授業形態：Q1-3, 2-3, 1-4, 2-4

感染症対策として遠隔授業の活用が進んでいる。そこで、学生には授業形態

に関する希望を質問し、教員には授業形態の予定を質問した。表3には4月前半に始める場合、表4には5月後半に始める割合を、それぞれ所属ごとに示している。網掛けは全体よりも5ポイント以上高く、斜体は低いことを示す。

まず4月前半の場合を示した表3をみると、遠隔授業を希望／予定する回答者が多い。全体では7割以上が遠隔授業を選択した。特に多いのは、医学部、理学部、国際地域創造学部の学生である。学生に比べると教員は教室での授業を選びやすく、特に人文社会学部ではほぼ半分の教員が教室での授業を予定すると回答した。

つぎに5月後半の場合を示した表4をみると、表3に比べて教室授業を希望／予定する回答者が多い。全体では6割以上が教室授業を選択した。特に多いのは、人文社会学部、国際地域創造学部、法文学部、観光産業科学部の学生である。それに対して、理学部や医学部の学生は全体に比べて遠隔授業を希望する割合が高い。

表3 授業形態：4月前半から

各カテゴリに占める%	教室		遠隔		合計 人
	いままでどおり	対策をとって	できるだけ	すべて	
学生 人文社会学部	2.1	22.8	45.6	29.5	193
国際地域創造学部	1.3	14.8	36.4	47.5	236
法文学部	0.6	16.3	44.9	38.2	178
観光産業科学部		14.0	44.0	42.0	50
教育学部	3.7	26.5	39.0	30.9	136
理学部	4.0	18.4	31.2	46.4	125
医学部	1.2	7.0	34.9	57.0	86
工学部	4.5	23.1	37.1	35.2	264
農学部	7.4	16.9	41.2	34.5	148
大学院生ほか		25.0	41.7	33.3	36
教員 人文社会学部	3.6	42.9	28.6	21.4	28
国際地域創造学部		35.0	45.0	20.0	20
そのほか	3.1	34.4	37.5	21.9	32
全体	2.9	19.9	39.2	37.9	1,532

網掛け：全体より5%ポイント以上高い

斜体：全体より5%ポイント以上低い

表4 授業形態：5月後半から

各カテゴリに占める%	教室		遠隔		合計 人
	いまままでおり	対策をとって	できるだけ	すべて	
学生 人文社会学部	15.0	48.7	29.5	6.7	193
国際地域創造学部	6.8	48.7	28.0	16.5	236
法文学部	5.6	56.2	27.0	11.2	178
観光産業科学部	2.0	64.0	22.0	12.0	50
教育学部	12.5	50.7	28.7	8.1	136
理学部	12.0	37.6	32.8	17.6	125
医学部	7.0	43.0	37.2	12.8	86
工学部	11.7	47.0	27.7	13.6	264
農学部	13.5	47.3	27.7	11.5	148
大学院生ほか	8.3	47.2	30.6	13.9	36
教員 人文社会学部	3.6	57.1	21.4	14.3	28
国際地域創造学部	5.0	65.0	25.0	5.0	20
そのほか	3.1	56.3	15.6	25.0	32
全体	9.9	49.1	28.4	12.6	1,532

網掛け：全体より5%ポイント以上高い

斜体：全体より5%ポイント以上低い

不安に感じていること、困っていること：Q1-5, 2-5, 3-6, 1-6, 2-6, 3-7

調査では、不安に感じていることを選択肢として列挙し、複数選択で回答してもらった。あわせて、不安に感じていること、困っていること、大学等に対する提案を自由に記述してもらった。それらのうち、不安に感じている／困っていることを示したのが表5と表6である。

表5は、こちらで用意した選択肢に関する結果である。全体で見ると、6割以上が、「自分が感染」した／すること、「自分が感染源」となった／なることを不安に感じている。自分が感染しないだけでなく、他人に感染させないようにすることを心配している。次いで約5割が、授業時に座席間隔を空けることのできるだけの「教室確保」に対して不安を感じている。特に教員や職員で割合が高い。これらに比べると割合は低いが、「収入減少」や「遠隔授業」に

対する不安を示した回答者もいる。特に「遠隔授業」は、教員（人文社会学部、国際地域創造学部）と職員が不安に感じている。職員に対しては「在宅勤務」も設問したが、大学本部で不安に感じている割合が高い。職員の中では、大学本部のほうが他部局に比べて不安を抱えている職員が多い。

表5 不安に感じている／困っていること

各カテゴリに占める%		自分が感染	自分が感染源	収入減少	遠隔授業	教室確保	在宅勤務	合計 人
学生	人文社会学部	67.4	60.6	28.0	16.6	53.9		193
	国際地域創造学部	65.7	57.2	24.2	15.7	44.1		236
	法学部	72.5	73.6	32.0	9.0	51.1		178
	観光産業科学部	70.0	68.0	32.0	10.0	44.0		50
	教育学部	73.5	64.0	33.1	21.3	47.8		136
	理学部	59.2	56.8	19.2	16.0	46.4		125
	医学部	61.6	60.5	17.4	12.8	41.9		86
	工学部	61.0	51.5	28.8	18.2	43.2		264
	農学部	62.2	57.4	24.3	18.2	49.3		148
大学院生ほか	55.6	55.6	25.0	22.2	30.6		36	
教員	人文社会学部	75.0	78.6	14.3	60.7	85.7		28
	国際地域創造学部	75.0	75.0	20.0	60.0	85.0		20
	そのほか	53.1	56.3	12.5	25.0	53.1		32
職員	大学本部	81.8	81.8	18.2	45.5	63.6	72.7	11
	そのほか	50.0	55.6	27.8	55.6	61.1	55.6	18
全体		65.3	60.3	26.1	18.3	48.3	64.3	1,561

網掛け：全体より5%ポイント以上高い

斜体：全体より5%ポイント以上低い

「在宅勤務」は職員数に占める%

表6には、自由記述の内容を分類してカウントした数を示している。もっとも多かったのは、海外や県外から沖縄への移動に伴うウイルス移入に関する記述である。学生／教員／職員を問わず、また所属先を問わず、言及があった。次いで多いのが、集団感染、基礎疾患や持病を持つ人に感染させること、家族に感染させることへの不安である。これらは学生が学部を問わず言及していた。ここまでの情報をあわせて考えると「海外／県外から移入したウイルスが、地元出身者を介して家族に感染することを懸念する人が多い」と整理できる。

学部ごとに特徴がみられる内容として、就職活動に関する言及が、法文学部、観光産業科学部、工学部、農学部で多かった。その一方で、実習関連の事項が多く挙げたのが、教育実習を控える教育学部生、病院実習を控える医学部生である。このほか、アルバイトや寮生活に関する不安も挙げた。自由回答の詳細な内容は表には示していないが大学等への提案としては、人が集まる契機となる履修登録確認手続きのデジタル化、教室への消毒液の設置など、多様な意見が集まった。それらについては「自由記述編」を参照されたい。

表6 不安に感じている／困っていること：自由回答

自由回答に記述した人数		域外流入	集団感染	疾患関係	家族感染	就活関係	実習関連	アルバイト	寮生活
学生	人文社会学部	6	6	5	2			3	
	国際地域創造学部	7	3	5	5	1		2	
	法文学部	9	3	3	5	7	1	2	1
	観光産業科学部	1		1	1	5			
	教育学部	2	3	1	4		10	4	
	理学部	5	6	2	2			1	
	医学部			2			5		
	工学部	7	2	1	2	5		3	
	農学部	4	2	2	2	3			
大学院生ほか	2		3	1	1	1	1	2	
教員	人文社会学部	3	2		1		1	1	
	国際地域創造学部	1				1		1	
	そのほか						1		
職員	大学本部	3	1						
	そのほか	5							1
全体		55	28	25	25	23	19	18	4

職員の業務環境：Q3-3, 3-4, 3-5

最後に、職員に対してのみ質問した3つの項目を紹介したい。感染症対策として、自分と他人との距離を空けること、在宅勤務（テレワーク、リモートワーク）、書類に付着するウイルスを避けるための電子決済などが推奨されている。それらに対する意見を示したのが表7である。

全体でみると、もっと職員間の距離を空けてほしいという意見に比べて、在宅勤務や電子決済を推進することを求める意見が強い。特に電子決済は大学本部でも各部局でも8割以上の職員が支持している。ただ、大学本部では職員間の距離をもっと空け、在宅勤務をもっと推進してほしいという意見が多いのに対して、各部局ではいずれも3（中間）が多い。こうした違いの背景には、表5で示したように、大学本部では自分が感染することや自分が感染源となることに対する不安を抱える職員が多いことがあるとみられる。

表7 職員の業務環境に対する意見

各カテゴリに占める%		そう思う			そう思わない		合計 人
		1	2	3	4	5	
もっと職員間の距離を	大学本部	27.3	45.5	9.1	9.1	9.1	11
	そのほか	23.5	5.9	35.3	17.6	17.6	17
	全体	24.1	20.7	24.1	13.8	13.8	29
もっと在宅勤務を	大学本部	45.5	36.4	9.1	9.1		11
	そのほか	41.2	11.8	41.2		5.9	17
	全体	41.4	20.7	27.6	3.4	3.4	29
もっと電子決済を	大学本部	81.8	9.1	9.1			11
	そのほか	76.5	5.9	17.6			17
	全体	75.9	6.9	13.8			29

自由記述編

はじめに

琉球大学の構成員（学生、教員、職員）が新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に関する現状をどのように捉えているのかを把握する目的で、琉球大学の政策科学講座・国際関係論講座（以下「政国講座」）が主体となってアンケート調査を実施した。この調査において、学生、教員、職員いずれも最後の項目として自由に記述する欄を設け、次の質問に対する任意回答を求めた（以下、自由記述または自由回答と呼ぶ）。

Q[番号略] [任意] そのほか、新型コロナウイルスについて、困っていることがあったり、困っている知人や友人がいる場合は、教えてください。また、感染対策として、大学/学部/研究科に求めたいこと、提案したいことがあれば、記入して下さい。

この回答結果についての概略と分析を「自由記述編」（以下「自由回答を読む」）として、ここにまとめる。すでに ver.1 として 2020 年 3 月 31 日 21 時 20 分から 4 月 2 日 18 時までの回答者 1,367 名ぶんについての報告を公表しているが、本報告はその後 4 月 6 日までに得られた回答を合わせた 1,561 件を対象としてアップデートし、構成についても修正整理を加えた。

アンケート調査の冒頭部分において、調査結果は「新型コロナウイルスの感染拡大を抑止しながら、琉球大学の教育研究活動を維持する方策を検討する」ための「基礎資料として公表する」、「調査結果は個々の回答ではなく」「集計した結果を公表」するという指針を示した。また誤解を避ける必要から「これは大学本部による意見聴取ではなく、あくまで教員による実態把握のための調査」であることを追記した。本報告はこれらの指針に基づいている。また自由記述を書き込んだ回答者は全て、調査協力に対して「同意する」を選択していた。

自由記述の分析においては、それをどのように「集計した結果」として発表するのは社会調査における課題のひとつでもあるだろう。本報告は、「集計編」の定量的分析に対応する、定性的・解釈学的分析と位置づけて行う。近年、KH Coder や Exploratory などテキストマイニングのツールが普及しつつあるが、これらを活用した分析と可視化は、通時的な変化を追うための継続調査によって意義づけられるところでもあるため、ここでは採用せず、経過観察の実施の有無も含めて今後の課題としたい。

本報告では、まず第1節で総論をまとめたうえで、第2節以降に個別のトピックを立てて論じている。「感染拡大抑止」と「教育研究活動維持の方策」はこのアンケート実施の主眼であったこと、アンケート実施時期は2020年度前期授業の開始時期が論点とされていたときと重なっていることを踏まえ、第2節では感染症対策への言及の特徴、第3節は授業開始時期について採り上げ、第4節でそれら以外の特徴的な言及をまとめた。第5節では具体策の提案内容をレビューし、第6節は大学方針への意見の傾向を見る。最後に第7節は、「集計編」表6でも析出された移動をめぐる言説に焦点を当てた。

なお、本報告において自由記述を引用する場合も、自由記述のテキストをそのままのかたちで全て公表することはせず、個人を特定されないようにする配慮、冗長性の回避、表現上の適切性を考慮することなどの目的から、報告者によって表現を改めたり省略した箇所があることをお断りしておく。

1. 総論

まず、緊急で短期のアンケート依頼に対して、自由回答を記入した件数の多さ(398件/1561人)は注目に値する。この調査が大学当局によるものとの誤解から、自由回答欄にも誤解に基づくと考えられる記述が数件あった。と同時に、こうした意見を尋ねられる機会を求めていたという主張も、例えば次のような意見に伺える。

今回このアンケートが回ってきて、コロナに対する危機感を持って具体的に学生にアプローチして下さる機会に触れることができるとも安心しましたし、嬉しいです。

このようなアンケートなどで大学関係者の方に私と同じような意見を持つ人がいることを知って欲しいです。

迅速な決定が求められる危機管理対策はトップダウンになりがちだが、組織が構成員の意見を汲み上げて対策に活かすことの意義を示している。

次に、琉球大学、あるいは一般的に大学において、学期が開始されれば「クラスター感染が起きてもおかしくない」「起きるだろう」との認識を多くの回答者が持っていたことが指摘出来る。3月末から4月初旬のこの調査実施時点で沖縄県内の感染者数は低く抑えられていると見られていたが、「大学は、海外・県内外から人が集まる特殊な空間」なのであり、「先読みした対応」が必要、「学内で感染者がいらないから通常通りできるというのはとても危険な判断だと考えています。私の周りには妊婦さんやお年寄りと関わる人がいるためその方達を危険にさらしたくありません」などの記述が見られた。

「判らないことが多すぎる」「37.3度は登校してよいのか」「集団のなかにいるということが怖いと感じてしまっている」「大学に行くのが本当に怖いです。休んだら成績が下がる。命と学業、どちらをとるか天秤にかけられているような気持ちです」といった率直な不安の表明もさることながら、自由記述の多くが、事例や対策など具体的に踏み込むものだった。他大学、他都道府県、そして海外の事例を参照し、比較分析して、琉球大学の方針として採り入れるように提言するものも多く、他大学の事例としてすでに決定されている「授業の開始延期」の提案、延期後の開始時期としてはゴールデンウィーク明けという時期が目安感として広く共有されている様子が伺えた。

総論としては、アンケート回答者の多数を占めた学生からの自由回答が、これらの生活範囲や活動領域の多様性を雄弁に物語っている点を強調しておきたい。大学執行部や危機対策本部、教職員が3月から4月のこの時期に十分にフォローできていなかった観点が多く含まれているからである。本調査と並行した時期に、琉球大学学生有志による学長への申し入れを端緒としたアクションが起こっており、これは後に「沖縄県内学生への緊急支援を求める学生有志の会」として、沖縄県への要請行動と記者会見などに結実していったことを、重要な参照点として補足しておく（『沖縄タイムス』2020年5月6日、『琉球新報』5月16日など）。

いっぽう、英文の記述が2件あったことを、今度は回答の少なさという点で着眼しておきたい。大学には留学生や研究者として多数の非日本語話者が共存している。以下からも明らかなように、留学経験や国際基準という視座は、感染症対策で参照軸として重要だった。それらの構成員からの声はどのように聞き届ける機会があっただろうか。本アンケート調査もそのような射程を十分に持ちえていなかったという反省点に、言及しておきたい。

2. 多様な立ち位置から求める感染症対策

自由回答からは、立ち位置によって多様で異なる対策の想像力が伺えた。その上で、グローバルな移動を身近で日常的な経験として持っているという前提から、感染症の危機を捉える意見が多かった。

例えば、「学生」といっても一括りにできない、県内生 / 県外生という見方、留学生、新入生、大学院生などの多様な立場が表明されていた。また、アルバイトによって学生たちは、大学キャンパスとは異なる人びととの接点を持っていることが判る。学生たちもまた、年少者・高齢者や障がい者の養護・介護の現場、グローバルな観光業の現場など、日常的に特定不可能な人びとと接している。これを踏まえて、感染がキャンパスに持ち込まれる不安、キャンパスの

感染が地域社会に影響を及ぼしてしまう不安が語られていた。

授業の必要性も立場によって多様な観点が表明されていた。公務員試験や教育実習を控えて早めの方針決定を求める声、医学部生や介護職を目指す分野など資格取得や認定に関わる必修科目について「学習権の保障を」との声があった。また、学校や病院への感染拡大を恐れる声は、附属学校や附属病院を擁している大学ならではのリアリティを持っている。

「困っている知人や友人」との問いかけ文に対して、持病や基礎疾患の具体名を挙げつつ友人学生や家族に配慮する声がとても多かった。

もし僕がウイルスを持ち込むと身内が重症化してしまう恐れがあります。なので僕はこのウイルスが治らない限りは学校にはいきたくありません。

呼吸器系の疾患がある友人も、自らが注意しても教室での講義という三密に近い環境では、感染から重症化のリスクが大きく通常通りの開講にとっても不安を感じています。私自身も、同居する高齢の祖母へのウイルス媒介者になるのではないかと危惧しています。現状を踏まえて「正しく恐れる」ような判断・対策を切に願います。

アルバイトで障害者の介助をしています。仕事柄、日頃から感染症への細心の注意を行なっていますが、もし感染してしまうと重篤化する可能性が高い利用者が殆どです。多くの人が集まる大学に行くことに対してとても不安を持っています。

教育学部は小中学生や高齢者、障がい者の方々と関わる機会が多々あります。若者はウイルスに感染していても症状が出にくいとも言われている中で、もしかすると発症している学生がいることも想定できると思います。

… 私達の学習のために周囲を危険に晒すことは間違っていると思います。

教員からは、非常勤講師の権利保障の訴えも上がっていた。記述は専任教員のものとは非常勤講師のものと判別しがたいが、その保障を求める視点は、沖縄県という島嶼県の特徴が背景にあると考えられる。調査実施期間と並行した時期に、大学等非常勤等ユニオン沖縄が、沖縄県内の大学に対して講義開始の延期を求める緊急要請を4月1日付けで発表していた（『琉球新報』2020年4月3日ほか）。沖縄県内大学を複数受け持つ非常勤講師は多く、大学間で異なる取組みを比較する視座を持つ重要なポジションであることが判る。

事務職員からは、沖縄県の対応にあわせるのではなく、国立大学法人自らが率先して、感染拡大を予防する措置を求める意見、学外利用者についての対応マニュアルを求める意見など具体的な声があった。

3. 授業開始の延期を求める声

授業開始は5月前半にしたほうが良い、という意見が定量的分析で多数を占めていたことは「集計編」が示した通りだが、同じことが自由回答にも見える。自由記述から見えてくるのは、その理由である。年度末と年度始めの人の移動にともなう危機感を表明した記述が多く見られた。感染から発症までの潜伏期間と言われる2週間の待機期間を、県外から移動した者が確保できるようにとの指摘のほか、消毒など教室の安全対策や遠隔授業への切り替えの準備に要する期間が必要という観点が挙げられていた。

4. 授業開始延期以外の意見

前述の延期提案以外で、大学の提示した対策に関する意見として、まず、教室の安全性確保は困難だという不安は、学生・教員を問わず広く共有されていた。特に、「3密」回避の難しさへの具体的な言及が多数みられた。消毒液、

マスクなどは、今後も充分に行き届かないと考える意見が多数だった。猛暑と梅雨や台風の季節を迎える沖縄県下の教室では窓を開ける換気対策は現実的ではないとの意見も上がった。

次に目立つのは、欠席の取り扱いへの不安や要望である。これは次項でも言及する。このほか、琉球大学の履修登録の一連の手続きは紙媒体でのやり取り、対面式での登録調整が行われており、「アナログすぎる」これらに対する不安の声があった。その反面、オンライン化が加速化することを想定して、学生のネット環境格差、パケット不足、アクセス集中に対する大学サーバーの脆弱性への不安の声も見られた。

安全確保への関心は教室の問題に留まらなかった。図書館、共用PC設備、学寮、サークル棟などへの対策が行き届いていないという現状の指摘が多数あった。独り暮らしの学生は、学食の「ミール」が中心となりがちなので、生協食堂への不安の声もあった。

授業のみがコロナの感染源になるとは思えない。例えば、サークル活動や生協、また事務との接触なども感染拡大のきっかけとなりうる。学長からのメッセージには授業実施のみの対策について書かれていたが、それでは感染拡大は防げない。

大学当局の授業開始の判断は教室の対策に限定されているとの指摘だが、そのような視野に収まりきれない波及を考量する必要があることが現れていた。

「報告レポート」で確認した通り、回答者の多数が学生であったため、学生生活についての意見も寄せられた。4月の新入生歓迎の時期であり、特に新入生に対して、学生同士の交流の場がなくなることを心配する声、夏休みやGWはしっかり確保してほしいとの意見などがある。また就活の日程はどうなるのか、延期措置をとる首都圏の大学との差が生じるのかなど、就職活動をめぐる

不安の声もあった。

首都圏の大学との日程の乖離が生まれることで、県外就職活動がしづらくなるのではと考えている。また、単位や卒業条件に関しては、コロナになったもん負けの現状であり、感染後も自宅で欠席分を補填することで予定通り卒業をしたいと思っている。今の大学の対応では、コロナに似た症状が現れても黙って大学に通うと思う。

このほか、通学手段（運転免許、自家用車を持たない場合）の不安、島嶼県であることから、感染拡大による医療機会の不足が被害を拡大するという懸念も見られた。学生の移動について、2週間の自主隔離の要請が行き届いていないとの指摘も上がった。

5. 遠隔授業ほか具体策の提案

個別の具体的な提案も沢山あった。Zoom など活用した遠隔授業、メールによる課題、検温装置の設置、教室定員を半分にして割り振りをやり直す、少人数での実験の提案のほか、できる限り短い時間で帰宅できるよう授業時間の短縮の提案もあった。また、対面への不安の表明は「わがまま」と見なすべきではなく、学生・教員いずれもが直面する問題として、遠隔を選択肢として考えてほしいという観点があった。

遠隔授業に対する不安は、学生よりも教職員のほうが強いというのが「集計編」の分析結果に見られた。その背景として、遠隔を可能にする技術的環境整備の現実認識の差異があるだろう。教員からは、全ての学生が遠隔教育を受けられるIT環境整備が必要との声があり、通常と同じような教育機会の公平性や平等性が担保できるのかという懸念が上がっていた。「eラーニングは、リアルな講義の代替にはならない」として大学の授業という質の問題も指摘され

た。「機械音痴の教員にサポートを」という教員の技術を疑問視する偽らざる正直な学生の声も確認しておこう。

遠隔授業は今の琉球大の状況から考えると、全面実施は難しいと思います。準備時間も設備も整ってない上、実習系の授業、特に理系科目は遠隔授業に振り替えられるものはさらに限定されるでしょう。ちなみに、すでに実施している海外の大学の事例を見ても、遠隔授業では回線がみだれたり、つながりづらいなど様々な問題が生じています。

学生からは、留学経験を踏まえたオンライン授業へのポジティブな見解が見られた。また、オンラインならではのメリットに踏み込む言及も見られた。

海外の大学はすでに残りの全ての授業をオンラインにしている所がほとんどです。

現在留学先の大学のオンライン授業を受けているが、今のところは問題なくここ2週間は過ごせているので、琉大も落ち着くまではオンラインにするべきだと強く感じます。県外から帰ってくる人も多いと考えると、せめて現行のスケジュールでいくにせよ、3週間（最初に2週間は潜伏期間、1週間は余分に）はオンラインに移行したほうが”十分な対策”への一歩だと思います。

受講したいけれど時間帯が被っている授業についても単位は要らないので見られるような措置が有れば本当に嬉しいです。

オンライン授業のできるのであれば、もっと自由に授業を選択したいです。取りたい科目が必修と被るし、学年の違う必修同士も被ることがあります。

公休・公欠の措置に関しては、ウィルス拡大抑制のための自主的欠席を認めること、出席確認は今年度に限り行わず3分の1の欠席で不可とする規程も無効にするなどの措置や、体調不良の際に報告しやすい、休みやすい環境作りが必要だとの提言があった。

「社会生活での距離を確保すること (social distancing)」については、具体的かつ科学的根拠をもった数値基準を示すべきとの意見が挙がっていた。

学費を賄うためのアルバイトが減少するなど経済状況の悪化を予想して、学費の減免、学費納入期日の延長を検討して欲しいとの提案も見られた。

このほか、サークル活動や新入生歓迎行事にも、大学が禁止あるいは自粛要請するなどのかたちで関与してほしいとの意見、春休みの県外・海外の旅行等の人数・行き先などの実態、感染者の情報公開をしてほしいとの意見も上がった。

6. 大学の方針決定とその公表に対する意見

琉球大学の方針決定とその公表については、「楽観的」「対策や方針決定が遅い」「本部が責任をもって決断しないことにより、多くの混乱を招き、非常に無駄な時間と労力が消費された」などの厳しい意見が多数挙がった。公式サイトによる学長発信はメッセージとしてその表現が注目されやすいこともあり、「学長のコロナに打ち勝とうというメッセージにはガッカリした」という反応として現れていた。

アンケート調査期間は、大学が段階的に方針を明確化する期間と重なっていたことに、ここでは留意しておきたい。講義の実施に関連して大学は「基本的な考え方」(4月1日)、「学長からのメッセージ」(4月2日)、「(教職員向け)ガイドライン」「(学生向け)講義等の実施について」(4月3日)を、大学ホームページのお知らせ欄 (<http://www.u-ryukyu.ac.jp/news/>) で公表している。大学が授業開始の延期を許容する方向を示したことは、アンケートで全体

の38.8%が5月前半、24.0%が4月後半がよいとした回答（「集計編」表2参照）が示す方向に、結果として沿った方針変更になっており、対策本部と、大学構成員との間で、この調査期間の間に起こっていた意見調整の動態を彷彿するものといえる。

同時期には普及していた2週間の待機という認識と、授業開始日の設定が齟齬を来すことなど、社会で呼びかけられている対策と関連付けた意見が多く見られた。なかでも、他大学の措置に言及するもの（授業開始時期の延期措置のほか、沖縄大の自宅学習期間）、他大学で起こったクラスター感染に学んで欲しいとの切実な訴えも上がっていた。

学部ごとに異なる対応への疑問は多数あり、全学としての決定の意義や重要性を訴える意見が見られた。また、自粛に任せない強い呼びかけが必要だとの声があり、学内施設の使用を禁止しなければ、研究室によっては通常通りを強要されること、自粛要請下でもサークル・部活動が継続していることを挙げて、全学での「禁止」を切実に求める声もあった。

医学部・附属病院を擁する大学として、専門的意見を踏まえた対応をするべきとの記述、地域に対して感染爆発を想定した受入態勢の準備を望む声もあった。さらに先を見通した対策、グローバルな基準に基づく判断が求められていた。

大学側は最悪の事態、すなわち沖縄のロックダウンが起こった時のことを考えて何通りかの対応策を考えておくべきだと思います。その際に常勤講師がとるべき行動（学生を感染から守るために大学としてできること、教員が感染した場合に学生に移さないようにするにはどうすべきか、など）、非常勤講師への給与支払いなど、細部にわたって検討しておき、それを事前に教職員に示すべきだと思います。

国の統計や基準ではなく、国際的な基準、動向、研究を含め判断をしてほしい。医療関係者からの情報でも今後の厳しい予測が示されている。県の医療リソースは厳しいものがあり、地域全体への影響も考慮する必要があると思う。

「感染者が出たばあいの責任は誰が、どのように取るのか」といった厳しい表現、決定についての説明責任を求めるといった意見も上がった。

今この状況で、通常通り4月前半から入学式、授業を行なっていくのであれば、その選択をした理由、その選択をしななければいけなかった理由をしっかりと公表していただきたいと大学側に思います…カナダでは3月中旬の時点で小中学校は3学期が丸ごと休み（9月まで休み）が決まりました。他国と比べてもしょうがないかもしれませんが、なぜ、安全など考慮しないで今授業をはじめる理由があるのか大学側に答えて欲しいです。

7. 移動をめぐる記述について

休み明けの大学生の移動と感染拡大とを関連づける意見は、全国と同様に琉大でも見られたが、さらに離島県であるという観点がこれに加わっていた。

琉大のような大きなキャンパスでは自分のような県外から移入する学生が多く、無症状や潜伏の状態でウイルスを持ち込み（現在の沖縄県での感染者のほとんどが本土または国外からの持ち込みであるように）、離島での感染拡大が懸念されると思います。

海外や県外から移入したウイルスに地元出身者が感染し、それが家族や知人に感染するのではないか、という懸念が、多数の記述に表れていた。

やはり、県内生は自宅通いが多いため、家族にうつすのも怖く外出を控えたり、日々気をつけている。県内生と県外生の環境で、その意識が違ってくと思う。

感染者の多い県外地域から引っ越してきた学生は、自分が感染しているのではないか、周りに感染させるのではないかと、という不安を特に強く持つと考えるのが自然です。そうした学生の不安を取り除くには、授業開始を延期すべきと考えます。

不安を背景にして、出身や移動による家・内と外とを線引きするイメージが現れていることが伺える。これに対して、県外からの移入者（国内、海外）を蔑視する雰囲気生まれることを心配する意見も挙がっていた。

附録) 調査フォームのレイアウト

1 ページ：共通

新型コロナウイルスに関する学内アンケート：締切4月2日(木)18:00 [琉球大学政策科学／国際関係論講座]

この調査の目的は「琉球大学の構成員（学生、教員、職員）が新型コロナウイルスに関する現状をどのように捉えているのか」を把握することです。調査結果は「新型コロナウイルスの感染拡大を抑止しながら、琉球大学の教育研究活動を維持する方策を検討する」ための基礎資料として、公表します。ただし、これは大学本部による意見聴取ではなく、あくまで教員による実態把握のための調査です。

アンケートでは「所属」「年代」「身分（学生／教員／職員）」をたずねますが、回答者の特定につながる個人情報は（IPアドレス等も含め）収集しません。調査結果は個々の回答ではなく「年代」別など集計した結果を公表します。

調査主体は、人文社会学部国際法政学科・政策科学講座／国際関係論講座（主任：金成浩、阿部小涼、二宮元、萩原淳、山本章子、久保慶明：集計担当）です。公共政策に関する教育研究活動を実践する立場から、今回の調査が必要であると判断し、実施することにしました。お忙しいところ恐縮ですが、ご協力いただけますと幸いです。

問い合わせ先：kuboy@eve.u-ryukyu.ac.jp（集計担当）

***必須**

上記をふまえ、この調査への協力に同意しますか？ *

- 同意する
- 同意しない

次へ

Google フォームでパスワードを送信しないでください。

このコンテンツは Google が作成または承認したものではありません。 [不正行為の報告](#) - [利用規約](#) - [プライバシー ポリシー](#)

Google フォーム

2 ページ：共通

新型コロナウイルスに関する学内アンケート：締切4月2日(木)18:00 [琉球大学政策科学／国際関係論講座]

***必須**

ご自身について

あなたの身分を教えてください。 *

選択

あなたの年代を教えてください。 *

選択

戻る 次へ

3 ページ：学生

学生のみなさんへの質問

回答送信は1回のみです。

Q1-1. 所属を教えてください。*

選択

Q1-2. 2020年度の授業は、いつから始めるのがよいと思いますか？もっとも近いものを1つ選んでください。なお、これは大学本部による意見聴取ではなく、教員による実態把握のための調査です。*

4月前半（現在の予定どおり）

4月後半

5月前半

5月後半以降

Q1-3. 授業を【4月前半（現在の予定どおり）】にはじめる場合、授業形態はどのようにしてほしいと思いますか？もっとも近いものを1つ選んでください。*

教室で、いままでどおりにおこなう

教室で、必要な対策をとっておこなう（窓の開放、席の間隔など）

遠隔授業で、できるだけおこなう（難しい場合は教室で）

遠隔授業で、すべておこなう（教室では絶対にやらない）

Q1-3. 授業を【4月前半（現在の予定どおり）】にはじめる場合、授業形態はどのようにしてほしいと思いますか？もっとも近いものを1つ選んでください。*

- 教室で、いままでどおりにおこなう
- 教室で、必要な対策をとっておこなう（窓の開放、席の間隔など）
- 遠隔授業で、できるだけおこなう（難しい場合は教室で）
- 遠隔授業で、すべておこなう（教室では絶対にやらない）

Q1-4. 仮に授業を【5月後半】にはじめる場合、授業形態はどのようにしてほしいと思いますか？もっとも近いものを1つ選んでください。*

- 教室で、いままでどおりにおこなう
- 教室で、必要な対策をとっておこなう（窓の開放、席の間隔など）
- 遠隔授業で、できるだけおこなう（難しい場合は教室で）
- 遠隔授業で、すべておこなう（教室では絶対にやらない）

Q1-5. 新型コロナウイルスについて、不安に感じていることはありますか？該当するものがあれば、すべて選んでください。*

- A. 自分が感染する／しているのではないか
- B. 自分が感染させる／させたのではないか
- C. 収入が減少して学費や生活費が支払えなくなるのではないか
- D. 遠隔授業の場合、授業についていけないか不安
- E. 授業で教室を使用する場合、学生が距離を空けて座れる教室が足りなさそう
- F. 特にない
- その他:

Q1-6. [任意] そのほか、新型コロナウイルスについて、困っていることがあったり、困っている知人や友人がいる場合は、教えてください。また、感染対策として、大学／学部／研究科に求めたいこと、提案したいことがあれば、記入してください。

回答を入力

戻る

送信

4 ページ：教員

教員のみなさんへの質問

回答送信は1回のみです。

Q2-1. 所属を教えてください。*

- 人文社会学部
- 国際地域創造学部
- 教育学部
- 理学部
- 医学部
- 工学部
- 農学部
- 法務研究科
- その他:

Q2-2. 2020年度の授業は、いつから始めるのがよいと思いますか？もっとも近いものを1つ選んでください。なお、これは大学本部による意見採取ではなく、教員による実態把握のための調査です。*

- 4月前半（現在の予定どおり）
- 4月後半
- 5月前半
- 5月後半以降

Q2-3. 授業を【4月前半（現在の予定どおり）】にはじめる場合、授業形態はどのようにしたいと思いますか？もっとも近いものを1つ選んでください。*

- 教室で、いままでどおりにおこなう
- 教室で、必要な対策をとっておこなう（窓の開放、席の間隔など）
- 遠隔授業で、できるだけおこなう（難しい場合は教室で）
- 遠隔授業で、すべておこなう（教室では絶対にやらない）
- 授業の担当予定はない

Q2-4. 仮に授業を【5月後半】にはじめる場合、授業形態はどのようにしたいと思いますか？もっとも近いものを1つ選んでください。*

- 教室で、いままでどおりにおこなう
- 教室で、必要な対策をとっておこなう（窓の開放、席の間隔など）
- 遠隔授業で、できるだけおこなう（難しい場合は教室で）
- 遠隔授業で、すべておこなう（教室では絶対にやらない）
- 授業の担当予定はない

Q2-5. 新型コロナウイルスについて、不安に感じていることはありますか？該当するものがあれば、すべて選んでください。*

- A. 自分が感染する／しているのではないか
- B. 自分が感染させる／させたのではないか
- C. 収入が減少して生活費が支払えなくなるのではないか
- D. 遠隔授業の実施を求められても、対応が難しい
- E. 授業で教室を使用する場合、学生が距離を空けて座れる教室が足りなさそう
- F. 特にない
- その他:

Q2-6. [任意] そのほか、新型コロナウイルスについて、困っていることがあったり、困っている知人や友人がいる場合は、教えてください。また、感染対策として、大学／学部／研究科に求めたいこと、提案したいことがあれば、記入してください。

回答を入力

戻る

送信

5 ページ：職員

職員のみなさんへの質問

回答送信は1回のみです。

Q3-1. 所属を教えてください。*

- 大学本部
- 人文社会学部/国際地域創造学部/法務研究科
- 教育学部
- 理学部
- 医学部/附属病院
- 工学部
- 農学部
- 附属図書館
- その他:

Q3-2. 2020年度の授業は、いつから始めるのがよいと思いますか？もっとも近いものを1つ選んでください。なお、これは大学本部による意見聴取ではなく、教員による実態把握のための調査です。*

- 4月前半（現在の予定どおり）
- 4月後半
- 5月前半
- 5月後半以降

Q3-3. [任意] 現在の職場において、デスクの配置など、職員間の距離をもっと空けたほうがよいと思いますか？

1 2 3 4 5

そう思う そう思わない

Q3-4. [任意] 現在の職場において、在宅勤務（テレワーク、リモートワーク）をもっと進めたほうがよいと思いますか？

1 2 3 4 5

そう思う そう思わない

Q3-5. [任意] 現在の職場において、電子決裁の導入をもっと進めたほうがよいと思いますか？

1 2 3 4 5

そう思う そう思わない

Q3-6. 新型コロナウイルスについて、不安に感じていることはありますか？該当するものがあれば、すべて選んでください。*

- A. 自分が感染する／しているのではないか
- B. 自分が感染させる／させたのではないか
- C. 収入が減少して生活費が支払えなくなるのではないか
- D. 学生が遠隔授業に参加するための設備が足りなさそう
- E. 授業で教室を使用する場合、学生が距離を空けて座れる教室が足りなさそう
- F. 在宅勤務（テレワーク、リモートワーク）を求められても対応が難しい
- 特にない
- その他:

Q3-7. [任意] そのほか、新型コロナウイルスについて、困っていることがあったり、困っている知人や友人がいる場合は、教えてください。また、感染対策として、大学/学部/研究科に求めたいこと、提案したいことがあれば、記入してください。

回答を入力

戻る

送信